

For You

福岡シティ銀行は「ふるさと博多」と「ふるさと北九州」をふりかえるシリーズを次々に発行してまいります

博多に強くなろうシリーズ
No. 22

博多の 幽霊ばなし

お話

郷土史家

波多江五兵衛 氏

聞き手

博多町人文化連盟事務局長

帯谷瑛之介 氏

元福岡シティ銀行 常務取締役

小山 泰

対談 昭和57年7月

西日本シティ銀行

博多の
強さ

シリーズ 22

博多の幽霊ばなし

氏衛兵五江多波 氏介之瑛
氏 泰
郷土史家 文化局長 取締役
博多町 連盟事務局長 常務
お話し手 聞き手 波多江五兵衛氏 帶谷瑛之介氏 小山 泰

陽気な 博多の幽霊

小山 この町にも怪談はあるわけですが、博多の怪談にはどんな特徴がありますか。

波多江 一口で言えば、幽霊失格の幽霊ばかりです。

第一は、こともあろうに、足があるのです。カランコロンと下駄の音高く響かせたり、ドスンドスンと歩いてみたりする。

第二に、幽霊がどれもこれも博多方言を使う。「あなた、どこ行きござるとすな」、これじゃ、まるで「博多にわか」でちつとも恐くない。

第三に、博多の幽霊は短気者が多い。舞台装置よろしく灯りが細く震えたり、消えたり、裏の笹がサラサラと鳴ったり、鐘の音がポーン、そんな背景が全くない。いきなり出てくる。だから恐がられるところか、ほとんどの人が幽霊と話をしている。話しやすいと言うのです。

こうなると、博多の怪談はどうにもこうにも始末がつかない。こんな独特の博多風土の幽霊話がワンサとあります。

帶谷 では、その何やらおかしい幽霊のお話をお伺いしましょう。

足があつて、

博多弁喋る、短気者

波多江 江戸時代の末期の頃のお話です。博多でいちばん古いと言われる聖福寺の隣りに円覚寺という寺があります。

この寺の住職になった猶山和尚が、まだ聖福寺の典座として修行の身だったころのことです。猶山和尚が外から帰つてくると、門のところに提燈さげで立っている人がいる。

その人が、「そこに行きよんなざるとは猶山さんじゃござせんな（ありませんか）」と、例によつてこれが博多方言で話しかける。

「うん、あたきや（私は）猶山たい」「あの、あたきや蔵本町の山岸から来ました、あさつて山岸の法事でですけどどうぞ忘れんごと来てつかいざつせい（ください）」「うん行くはい」と返事して、「あんた誰な」と聞くと、「あたしやア蔵本町の山岸の惣右衛門ですたい」という。

「ぞうたん（冗談）言いなさんな」と言い、ハッと気づいて振り向いたと

きには、もう提燈下げた男は消えて見えない。よく考えてみると、山岸惣右衛門は七年前に死んでいる。自分で七年目の法事の催促に来るなんて、あつかましい幽霊たい、ということになるのです(笑)。

次は明治時代も末のこと、私の父が実際に体験した綱場町の話です。

当時店は夜十一時ごろまで開けていましたが、十二時頃になるとどこも締めてしまいます。すると、蔵本町の方から下駄をカランコロンと大きな音を鳴らして通る人がいる。

最初の何回かは、どこかの若い者が夜遊びに行って帰って来るのに違いな、と言っていたが、これが毎夜続く。よく考えてみると、内緒で酒呑んだり、女遊びをしている人が、あんなに足音高々に帰ってくるものだろうか、と疑問に思える。

いったいどのどいつだ、一べんつかまえてみれ、というわけで、足音が鳴るとガラツと戸を開けてみた。ところが、たった今まで町の真中まで響き渡った足音も消え、人の影ひとつ見えない。

さては幽霊の仕業やなと、それからその夜はみんな待機して足音が聞こえる「飛び出せ」と幽霊捕り物帳の始まりです。足音がする、戸をガラツと

開ける、パツと消える、見えない、これの繰り返し。

こうなると、意地でも幽霊を捕えてみせると策を講じる。初め幽霊が足音高くやって来ても、みんな戸の後ろに潜んでいて、町の真中までくると、両側からワーツと出て来て挟み撃ち作戦です。

今度こそはと一斉にそれ一つと飛び出す、影も形もない。これが毎晩続いて一カ月もたつと、町内の若い衆たちもばからしくなつて、「やーめた」となる。幽霊の方もそろそろ疲れてきたらしく、両方ともそれなりけり、というわけです(笑)。

小山 何だか少しも恐くないですね。

波多江 うちの父親も、それ一つと飛び出したくちだから、それは実際にあったことなのだ話してくれました。だから荒唐無稽な話ではなかったはず。これも足のある幽霊の見本です。

「文句のあるなら、生き返って来てみる」

帯谷 短気者の幽霊というのにもお目にかかりたいですね。

波多江 これは幕末の話ですが、今の市役所のつきあたりに、アメリカ文化



センターがあります、その辺りに刀研ぎ屋がありました。

腕がよく大へん繁盛していたが、ある日店の主人が病気で亡くなった。これでは店もやっていけない。幸い嫁がまだ若いということで、養子を迎えました。

これがまたできた人で、腕も亡くなった主人に勝るとも劣らない。店も繁盛する、夫婦仲も大へんいい。両親

は、いい養子を迎えて本当によかったと、胸をなでおろしていた。それから一年ほどたったある夜、突然幽霊が現れた。死んだ前の主人です。背景なし、音響効果なしに現れる短気者の幽霊の例ですね。

お嫁さんと養子さんの寝所にドカドカとはいつて来て、いきなり「やい起さる」とやったらしい。それじゃ雲助かやくぎのようなもの。「俺が死んだか



波多江 五兵衛氏

と評判が立つと、この評判をこのまま放っておく手はないと、これを店のPRに使うのです。

それが何と刀研ぎ屋の屋号を、「御研ぎ師幽霊屋」と改めたそうです。これが評判になって、ますますの繁盛。そうなつてくると博多のあちこちの連中が、「幽霊屋というのがいいそうな。どこかに幽霊が出ないか」と言っていたところ、案の定第二弾が出る。

現在の奈良屋小学校の裏側に**苺蕪屋**があったのですが、ここにも幽霊が出たということで、すかさず幽霊苺蕪というものを作つたそうです。これがまた売れるから、博多というところはおかしい町です。
帯谷 幽霊かまぼこというのも聞いたことがある(笑)。

博多っ子は幽霊なんか 恐くない

小山 幽霊が気味悪いものだという感覚が、博多の人々にはあまりないのでしょうね。私は幽霊と言えば、すぐ怨念という言葉を出すのですが……。

波多江 あまり怨みをこめたのはいま

せんね。

ぐつと新しく、昭和にはいつてからの話です。福岡市内のある総合病院の大部屋の患者たちから、病院にこんな訴えがなされた。「私たちの部屋には、ひとり亡くなつて空いているベッドがあるが、夜になつたら音がするし、へんなことが起こる」と。

ところが「この新設備の病院で幽霊話などあるものか。ここは科学のメツカだぞ」と、事務長も院長も相手にしない。そのうちに、医局の医師たちがその評判を聞きつける。そのひとりの柔道五段という豪傑が「そんなに言うなら、今日俺がそのベッドに寝てみせよう」ということになつたらしい。

明るる朝、その豪傑が真青になつて、「あらいかん、出るばい」と、医局に飛び込んで来た。ベッドからはこげ落ちるし、患者の騒ぐのも無理はないという。それで院長は、珍しいベッド供養なるものをしました。そうして、この一件はおさまつたといひます。

小山 何か出たわけですか。

波多江 形が見えたとか、こんな音がしたということはつきりしませんか、何か尋常でないことが起こつたことは確からしい。

小山 思つたより恐くないですね。

波多江 そうなのです。だから博多の

子供は幽霊をちつとも恐がらない。

唐人町におられた速水さんもおつしやつてましたが、大濠公園に火の玉が出るという噂がたつと、恐がるどころか若い娘たちが集まつて、夜中に火の玉見物に行つたそうです。そのくらいですから、祟るとか言つてみせても一向に恐がりません。

帯谷 陽気でへんに間が抜けているようなどころがあつたのでしようかね。怪談的恐さはないですね。

「お綱門」にこめられた女の執念

小山 怖い怖い幽霊のスターはいませんか。

帯谷 スターと言えば、お綱さんと空誉上人じゃないですか。

波多江 お綱さんの話は「お綱門」ということで、ご存じの方がいらつしやるかもしれませんが、昔の本丸から扇坂にくだつてくるところ、今でいう東門の奥のあたりに、誰言うともなく呼ばれたお綱門がありました。

お綱門は今もありませんが、朽ち果てた柱にさわると熱病にかかり、夜中にうなされると言われていました。寛永七年(一六三〇年)のこと、福



帯谷 瑛之介氏

岡藩士の明石四郎左衛門の妻お綱が、夫に嫉妬をもち逆上し、薙刀を手にして馬出の下屋敷から、大名町の明石家本宅までの道を急ぎ、城内の夫を斬ろうとして、この門まできて殺されたという「お話」です。

「お話」の始まりは黒田の二代目の殿さま忠之公が、江戸参勤交代の帰り道、大坂新町で采女という遊女が大そう気に入ったことです。さっそく身受けして、船に乗せて博多まで連れ帰って来て、城中に住ませた。

ところが、城中にはお秀の方という正式の第二夫人がいる。江戸時代、殿さまの奥方は、江戸屋敷と決まっていたから、第二夫人が公認です。忠之は采女にのぼせて、お秀の方に寄りつかなくなる。

筆頭家老栗山大膳が「こういうことでは政務にさしつかえる。采女を手離しなさい」と諫めるので、しぶしぶ明石四郎左衛門に、「その方、手厚く第二夫人にせよ」と、采女を下げ渡すことになりました。明石はお下げ渡しの采女を今の家庭裁判所のところに住ませ、本妻は箱崎の馬出に住ませる。初めのうちは、本妻のお綱さんをたてながら、殿さまのお声がかりだからと、ときどき、采女の方に通っていく生活を送っていた。

しかしお綱は武家育ちで礼儀正しい。三つ指ついて畏まり奉ります言葉で迎えるので、お城での緊張もほぐれない。一方采女は遊女あがりだから、夏は冷たい手拭いで体を拭いてくれるし、裸になって酒呑んでいると後ろから扇いでくれる。

だんだん采女の方にのめり込んでしまっ、お綱はなおざりにされてしまいました。いくら何でもひどすぎる、お綱は薙刀振りかざしてお城にのり込んで来るわけです。

帯谷 伝説によれば、明石は生活費をお綱に渡さなかつたそうです。

籾の節句が迫ってきた。本来なら長女のお妻のために籾壇を飾り、桃の花に灯をともし、白酒をくみかわす一家団らんの家庭であつたはずな



小山 泰

のに、今年は一転して寂しい日々。奉

公人の善作は見かねて、「私がお主人さまに会つて参りましょう。せめてお節句なりともお子さまたちのために盛大にしてさしあげたいものです」、そう言つて大名町の本宅に向かつた。

善作は明石に色々懇願したが、明石はもう聞く耳をもたない。善作は帰つても奥方に伝えようがないと、遺言を残して松林で首を吊つて死んでしまふのです。

そのことがお綱にも知れ、カーツとなつて薙刀かかえて斬り込んだところ、居候の浪人浅野彦五郎が斬りつけた。お綱は傷ついた体を薙刀を杖にして必死で本丸に向かつて石段を上つたが、吹き出る血潮は止まず、扇坂まで行つて門に手をかけたところで息絶えたというのです。

それ以後、その門に触れると高熱にうなされる。お綱さんの執念が祟るということで恐れられていました。そこでお綱の供養塔が建てられたのだそうです。このお綱さんの「お話」は単なる伝説なのでしょう。

波多江 それが残っているから困るのです。門を解体するときも、お綱門だけは祟るから壊しようがないと、今の家庭裁判所のところに長宮院というお堂がありますが、その境内にそのまま壊さず移したのです。

お綱のところの奉公人は二人いたのですが、別説ではお綱の悲運の死を追つて自分も死んだとなっています。九州大学の前の崇福寺の中の日切地蔵が、その奉公人を祀つたものだと言われています。

またお綱を斬つた浅野彦五郎の墓も「堅」町の正定寺の中にある。そういうものがきちんと残っていると、ああそれは伝説と片づけるわけにはいかなくなるのです。

帯谷 三月二日に惨劇が起こつたというところに、後の人が脚色して話を筋道だてた部分はあるでしょうね。波多江 そういうことを書いた「筥崎釜破古」という本がありますが、これが七通りもの話がある。後のものになるほど物語がかってきます。



髪ふりみだしてたどり着いたお綱門

帯谷 歴史の事実と考えたら、門には警護の侍もいるわけだから、それをずるりとくぐり抜けてはいったとは、少し変ですよ。

波多江 そうなのです。上の橋御門をはいったとしても、扇坂までは重臣の屋敷が並んでいる。また東の御門もある。そこをどうやってくぐり抜けたかは疑問ですね。

帯谷 バッキンガム宮殿にも泥棒がはいれたのだから、あり得たかもしれない(笑)。

波多江 空誉上人も三百年間祟って

三百年間祟った 空誉上人

小山 長宮院にお綱さんを供養するわけですが、その後が男女のいざこざを調停する家庭裁判所になっているのをおもしろいですね(笑)。

帯谷 だから私は、お綱さんは今なお生きているとよく言っています。

る博多の幽霊のスターです。

御笠川の洲は、江戸時代処刑場でした。ここで処刑された人が哀れだと、空誉上人は供養してあげるので。ところが黒田の二代目忠之は、自分が罪人として処刑したものを供養するとは何ごとだと、空誉上人を釜ゆでの刑にします。

帯谷 こういう話は、二代目の忠之のときに集中していますね。父親の長政は後継ぎにはできないと思っていたのでしよう。もし商人になるなら五千両やるし、坊主になるなら寺を建ててやると言っていたそうです。

波多江 空誉上人を、石川五右衛門と同じ釜ゆでの刑に処すると言い出したが、人をゆでるような大きな釜はない。どこかに作らせようと捜したのが、遠賀郡の芦屋釜。ところが釜師たちは、ここは茶の湯の釜を作るところでそんな釜は作れない、とにげてしまふ。

あちこちをあたって釜を作ることはできませんでした。ケチな話で、石川五右衛門のように菜種油を満たしてゆでるのは、油がもつたいいと言ひ、空焚きにしたそうです。その場所が前の県知事官舎の中です。これは約三百年間祟り、県知事が官舎にはいると、夜中にうなされてしようがない。

昭和の初め、大塚惟精という県知事

の時代に、県庁官舎の中の庭に供養塔が造られ、祀られることになりました。それ以後、県知事はうなされなくなつたそうです。恐い、子々孫々まで祟る幽霊というのは、これくらいです。博多では珍しい例です。

よねいちまる 米一丸の悲劇と 踏切事故

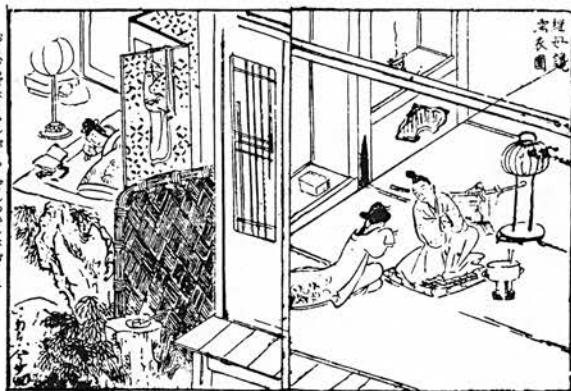
帯谷 米一丸というのも有名ですが、怪談としては何もないのでしよう。

あそこに、鉄道が敷かれて踏み切り死亡事故が多発したのが、米一丸の悲劇の話と結びつけられたのでしよう。

小山 大へん古い話なのでしよう。いづころの話なのですか。

帯谷 この話は史実としては妙な点が多いのです。新しい時代の名前や古い時代の名前が交錯して出てくる。米一丸は駿河国の木島長者の息子として生まれ、大へんな美少年だったそうです。この長者という名前、いかにも伝説的です。

波多江 その美少年米一丸は、二十歳で若狭国の湯川の長者の娘八千代姫を、嫁に迎えます。木島長者は、京都の一条家の領地を管領していたので、嫁を迎えた挨拶のため、新夫婦を連れて上



▲奥村玉蘭画筑前名所図録「継母濡衣圖」より

浴し、一条殿に参上しました。

大殿にあたる一条殿は、美しい八千代姫を見てどうしても側室として欲しくなった。そこで一計をめぐらすわけです。

一条はかつて博多を訪れたとき、路銀に困り名刀三池典太を土居町の奥伊右衛門に質入れた。その名刀を米一丸に受け取って来てほしいと言いつけるわけです。

要するに、米一丸と八千代姫を引き離して姫を奪おうという策です。

帯谷 奥伊右衛門なんて名前は、江戸時代風の名前ですね。

波多江 米一丸事件は、鎌倉時代だという書き方をしているのや、室町時代だというのがあります。しかしその頃には三池典太なんて銘の刀があるはずがないのです。

帯谷 米一丸は、主君の命令に逆らうわけにもいかず博多に向かいます。箱崎の館に逗留し、お金を払って名刀を返してもらい帰ろうとするところ、一条殿の意を受けた博多の守護職に殺されてしまいます。

代官じゃなく、守護職が突然出てくるのも妙です。八千代姫は侍女を連れ、米一丸を訪ねて博多にやって来ますが、事の次第を聞いて姫も自害し果てました。

それで米一丸が祟って出たという話かと言えばそうじゃない。箱崎の鉄道踏切事故が頻繁なのに、米一丸事件が関連づけられて、碑が建てられたと聞いています。ただ米一丸は地名として残っているわけですから、大へんな事件だったのでしょうね。

波多江 博多の怪談めいた伝説は、一見歴史的事実のように見えるが、どこまでが史実で、どこからが創り話かわからない。濡れ衣の話も時代背景ははっきりしませんからね。

「濡れ衣」の語源は 博多にあった

小山 濡れ衣の話というのは……。

波多江 佐野近世という侍には一人娘の姫がいる。そこに継母がくるわけですが、例によって娘をいじめめる。ある夜継母は夫に寝物語としてこう告げ口をする。「毎晩姫は、浜に行き男と逢い引きをしてふしだらなことをしている。その証拠は朝、姫の部屋に行ってみたらわかる。濡れた衣が掛けてあるはず」と。

翌朝父親は継母の言葉につられて、姫の部屋を調べてみると、濡れた衣が掛かっているではありませんか。父は怒り狂って、とうとう姫を斬り殺してしまつたのです。

それから毎夜、歌を唱って女の幽霊が現われる。姫は無実の罪を着せられて殺されたと訴えるわけです。あの濡れた衣は、継母が漁師をそそのかしてわざと娘の部屋に掛けさせていたことがわかつてしまいます。

帯谷 無実の罪のことを濡れ衣というでしょう。

小山 あれば博多の伝説からきた言葉なのですか。



▲濡れ衣塚

波多江 ええ、江戸時代に全国的に使われるようになった言葉です。だいたいそういう類の言葉は、芝居や浄瑠璃から始まる言葉が多いのです。

帯谷 この濡れ衣の話にしても、今の石堂川のほとりにはちゃんと塚があつて、その前のお寺は濡れ衣山松源寺と言つて、名前がちゃんと残っているのです。これも史実なのかどうか……。波多江 最初の文献は、寛永十八年の「雑和集」三巻のうちの中巻に出てきます。

帯谷 いかにもまことしやかですが、いつの時代の話なのか確かめる方法は全くありません。史実なのか伝説なのか、境目が点で、博多の話はユニークです。

波多江 だいたい博多では、怪談は話すほうもたよりなく、根拠があるような、ないような……。

帯谷 全くの伝説であるとか、お岩さんのように小さな事件から脚色されてふくらませた話とか、いづれかふつうははつきりしているのです。しかし博多のは境目がぼんやりしている。荒唐無稽かと言えば、そうでもない。何かあったということは事実なだけども……というわけです。その辺、非常に個性的だと思えます。

小山 ふつうの怪談だと、非業の最期を遂げたのでその怨みを込めて、その結果悪い者が狂い死にしたとかで我々は納得というような話が多いのですが、博多のは意外にそういうのがなくて、スーッと流れていくようですね。

帯谷 勳善懲悪というふうになっていない。米一丸の八千代姫の最期も悲劇なのに、それを供養しているわけでもない。

小山 空蒼上人も、三百年も崇るのなら、殿さまのほうに崇ればいいのに……(笑)。

波多江 濡れ衣は崇っていませんね。だいたい博多の人間は幽霊をばかにしているようなところがある。よーし出るなら見てやろうといった調子ですから。

でも、お綱さんの祟りはある程度信じられていました。福岡にまだ兵隊がいたころ、お綱門のある近くが火薬庫

だったのです。兵隊が当番で火薬庫の警備に夜行かなきゃならない。またあそこか、気味悪いので行きたくないなあ」とぼやいていたそうです。実際に祟りがあったとは聞いていませんが。

お琴・新兵衛事件が おことせんべいに

小山 幽霊話のもとになる心中だとか、姦通だとか、そういう話自体が博多には少ないということですか。

帯谷 それは違います。やはりありますよ。

波多江 明治の中ごろ、お琴と新兵衛事件という博多では有名な大惨劇がありました。たいへん強欲なお琴の母親が、夫婦仲を無理矢理裂くわけです。

同じ結婚させるなら、新兵衛よりも金持ちの男をつけなくちゃと、母親が企んでいた。それを知った新兵衛が出刃庖丁で斬りつけ、大惨劇となったという事件です。『福岡市史』の明治編にも出ているくらい有名な事件です。

しかし、博多の人はこれを惨劇として捉えるよりも、これだけ有名になったのだから何かに使わないともつたないかと考えるのです。すぐに芝居につくられ、お琴新兵衛の名前は売れに売

れたわけです。さつそくお菓子を作れとか……。

帯谷 お琴せんべいですね(笑)。

波多江 大正の末ごろまで売っていましたよ。

小山 博多は、京都に次いでお寺の多い町ですが、お寺には幽霊の話はないのですか。

波多江 材木町(現、天神三丁目親不孝通り)の安国寺の飴買い幽霊だけですね、他にはありません。

帯谷 飴買いの話というのは、ある美しい女の人が毎日決まった時刻に飴を買いにくるのです。飴屋の主人がある日後をつけてみると、寺のところでスーと姿が消えた。

その消えた墓の中から赤ちゃんの泣き声が聞こえてくる。墓を掘ってみると、亡くなった母親の遺体から赤ちゃんが生まれていたという話で、母が子を思う一念から、飴を買いにいき、嬰兒を育ててきたというわけです。

しかしこの飴買いの話は全国いたるところにあります。そのほかには、寺と結びついた幽霊の話は聞きませんね。

波多江 恐い幽霊話というのは、旧博多の町からは離れている。空蒼上人にしても、お綱さんにしても福岡城下の話だし、濡れ衣塚も米一丸も旧博多の町中ではありません。博多の幽霊とい

うのは非常にユーモラスなものしかないですね。

帯谷 博多の町の気質というものの反映でしょう。

小山 幽霊もやはり博多っ子なわけですね。たいへんおもしろい幽霊話、ありがとうございました。

■波多江五兵衛氏略歴

明治三九年、四百年の歴史をもつ博多綱場町の老舗、漆器商「角五」に生まれ、現在、波多江五兵衛商店) 家業を営むかたわら、昭和二十六年より「博多を語る会」に参加し、現在同会代表。「博多松囃子どんたく考」「博多方言」「博多のしきたり」ほか、博多に関する著書多数。平成二年十二月逝去。

●このお話は昭和五十七年七月にうかがいました。

○司会文責 福岡シティ銀行広報G 土居善胤

○本シリーズのお問合せは

〒812-8687 福岡市博多区博多駅前三丁目一番一号 福岡シティ銀行広報G
TEL 092・441・2222へ
昭和57年8月1日発行―99・3⑤
○福岡シティ銀行の窓口においております。

●本シリーズはインターネットに逐次掲載中です。
インターネットホームページ
<http://www.fcb.co.jp/>